

『絶対服従の掟』

著：愁堂れな

ill：水名瀬雅良

「……妻の借金は僕が責任を持って返す……なんとしてでも返すので、どうか……」

顔を上げ、切々と訴えてくる貴志の目があまりに真(しん)摯(し)であることが、麗を急速に苛立たせていった。

「頼む。月々少しずつでも僕が返していく。だから……」

色白の頬が紅潮し、興奮しているせいか貴志の瞳が酷く潤んでいた。天井の灯りを受けて煌めく瞳の美しさは八年前と比べてもまるで遜色ない。二十八という年齢を感じさせない瑞々しい肌。噛み締めてでもいたのか、紅く色づいている形のいい唇——別れたその日から変わらぬように見えるもと恋人の姿を前にした麗の胸は、込み上げる怒りで熱く滾(たぎ)っていた。

愛を囁き合った唇は今、妻の借金を謝罪し返済期日の延期を嘆願している。それほどに妻が大切なのかと思った途端、麗の中で何かが弾けた。

「……少しずつって、毎月いくらなら返済できるというんだ」

必死の形相で訴えかけていた貴志の言葉を遮(さえぎ)り、麗が冷たく言い放つ。

「……あ……」

貴志は一瞬虚を衝かれたように黙り込んだが、やがて項垂れ、消え入りそうな声で金額を告げた。

「五万くらいなら……」

「月五万、三百万返すのに利息なしで五年もかかる勘定だ」

語尾まで言うより先に言い返した麗に、貴志は一瞬顔を上げたが、すぐにまた項垂れ、

「すみません……」

先ほど山辺に謝っていたのと同じように、麗にも深く頭を下げてきた。

「銀行が貸してくれなければ、街金がある。山辺に紹介させてもいいが」

「……………」

低い声で告げた麗の言葉に、貴志は顔を上げた。怯(おび)えが走っているその表情に、麗の胸に新たな怒りが湧く。

貴志の目に自分はどう映っているのだろうか。八年の歳月を経た彼にとって——妻を得た彼にとって、自分との過去はもう思い出にも残っていないのだろうか。

厳しい債権者としてしか己を見ようとしないう貴志に対する怒りが、麗の背を押した。

「まあ、昔馴染みのお前を借金地獄に追い落とすほど、俺も人は悪くない」

苛立つ気分を抑えようと、噛み締めた唇の間から息を吐き出し、麗が低い声で言葉を続ける。

「……………」

それでも尚、不安そうに肩を震わせている貴志に向かい麗が告げた言葉は、ある意味常識を超えたものだった。

「どうだ、取り引きをしないか？」

「と、取り引き？」

貴志の眉が不審そうに顰(ひそ)められ、顔にはまた怯えの色が走る。

「ああ。昔馴染みのお前ならではの、返済方法を考えてやらないこともない。その取り引きをしないかと言ってるんだ」

麗の言葉に、貴志はますます怯えたような顔になったが、やがておずおずと、

「ど、どんな取り引きを……？」

そう尋ね、麗を真っ直ぐに見返してきた。

「簡単だ。ひと晩十万で俺に身体を売らないか」

「え？」

貴志の目が驚愕に見開かれる。

「十万やるから抱かせろ。その十万を借金返済に充ててやる……昔馴染みのお前に相応しい、返済方法だとは思わないか？」

「……………」

貴志の視線が泳ぎ、膝の上の拳が更にきつく握り締められるのを、麗はじっと見つめていた。

断るだろうか。それとも受けるだろうか——身を任せるだけで十万と思えば、なかなかいい条件だと受ける輩(やから)は世に多いかもしれないが、麗の知る貴志はそういった種類の人間ではなかった。

少女のような華奢ななりはしていたが、男として、人間としての誇りを捨てることなく、常に堂々と胸を張って人生を歩んでいるような、強い意志を持った男だった。曲がったことを厭い、潔癖さを決して捨てない彼の性質が、八年前の別れを生んだといってもいいほどなのである。

その彼がこんな申し出を受けるわけがない——それがわかっていて尚、麗がそんな申し出をしたのは、貴志をいたぶりたいからに他ならなかった。彼の胸に燃え盛る怒りが、そんな意地の悪い形となって表れただけであったのだが、顔を上げた貴志が告げた答えは、麗の予想を大きく裏切るものだった。

「……わかった……その条件、受けるよ」

「……………」

そんな馬鹿な——内心の動揺を悟られまいと、麗は驚愕の声を上げそうになった唇をぎっと噛み締めた。

まさか彼が受けるとは——信じられない、という思いがつい麗の口をついて出る。

「本当か」

酷く掠れた声になってしまったことで、麗ははっと我に返った。自分の手が膝の上で震えていたためぎゅっと握り締めたのを、貴志がじっと見つめているのに気づく。

「……ああ」

同じように膝の上で拳を握り締めながら、貴志が小さく、だが力強く頷いてみせる。そんな彼を前にした麗の胸中は複雑だった。

見た目はまるで変わらないが、この八年の間に貴志の内になんらかの変化が訪れたとでもいうのだろうか。あれほど誇り高く、あれほど潔癖であった彼がこんな馬鹿げた提案を受け入れるとは——。

「……それで妻の借金が返せるなら」

貴志の細い声が告げた言葉に、麗はそういうことか、と改めて納得し、溜め息をつき

そうになる唇をまたぎっと噛み締めた。

この八年の間に大きな変化はあった。彼は結婚したのだ。愛する妻を守るために、自分が犠牲になろうとしている——思えばそんな情に厚い男であったと麗は苦笑したのだが、唇を噛み締めすぎたせいか笑ったと同時に口の中に血の味が広がり、顔を顰(しか)めた。

「……………」

麗の顔を貴志は思いつめた表情でじっと見つめている。

「取り引き成立だな」

その視線がまた麗を酷く苛立たせ、麗は勢いよく立ち上がると貴志の腕を掴んだ。

「あの……」

「早速十万、稼がせてやる」

言いながら貴志を引きずるようにしてドアへと向かい、勢いよく開いた麗は、ドアの前に佇(たたず)む男二人をじろりと睨んだ。

えへへ、と照れたように笑う響と、バツの悪そうな顔をした山辺の二人は、どうやらドアの前で立ち聞きをしていたらしい。

「そういうことだ。借金返済は俺に任せろ」

「ちょっと、社長」

「待てよ、麗！」

驚く二人の声を背に、麗は貴志を引きずったままエレベーターに乗り込むと一階のボタンを押した。

「……………」

白々とした灯りの下、そそけ立ったような貴志の頬が麗の目に眩(まぶ)しく映る。

まさかこんな再会をすることになるとは、と感慨に耽る間もなくエレベーターは地上に到着し、今日は自ら運転してきた車の助手席に貴志を乗せると、慌てて見送りに出ようと店の従業員が飛び出してくるのにも構わず、麗は車を発進させた。

キキ、とタイヤが鳴り、通行人たちの間から「危ない」という悲鳴が上がる。

らしくなく苛立っているのは彼のせいだ——ちらりと助手席へと目をやり、忌(いま)々(いま)しげにハンドルを叩いた麗に、貴志はびく、と小さく肩を震わせたが、何も言おうとせずただ目を伏せていた。長い睫が震えているさまが、麗の内に苛立ちとともに欲情の焰(ほむら)を立ち上らせてゆく。

十分もしないうちに車は麗の住む代々木の高級マンションの地下駐車場へと到着した。最近マンションを購入したという貴志には、麗のマンションの価格がわかったのだろう。エレベーターで最上階へと昇り、部屋に入った途端、目の前に開けた東京の素晴らしい夜景にぽかんと口を開け、凄いなというように室内をぐるりと見回していた。

が、そんな彼も麗に腕を引かれ、寝室に連れていかれると再び目を伏せ、肩を震わせ始めた。麗はごちゃごちゃと物を置くことを好まず、寝室にはキングサイズのベッドにサイドテーブルくらいしかない。これから起こるべきことを予測し、身体を強張らせている貴志を前に、麗の欲望はますます膨らんでいったが、頭のどこかでは貴志が最後の最後で拒絶するのではないかという期待を捨てきれずにもいた。

「脱げよ」

腕を放し、そう告げた麗の声に貴志の肩がまた震える。

「脱がせて欲しいならそう言え。『脱がせてください』とな。俺はどちらも好みだ」

追い詰めるような言葉を口にしたのも、貴志が『許してほしい』と懇願してくるのを待っていたためであった。

だが――。

「……脱ぎます」

ゆるゆると顔を上げ、細い声で返してきた貴志の言葉は、麗の期待を裏切るものだった。

本文 p40～47 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>